

■ 崋山が見た田原 (一)

今回は、渡辺崋山が見た近世の田原の風景について紹介します。

天保四年(一八三三)の春、四一歳の崋山が田原を訪れた際、『全樂堂日録』『客参録』『参海雑志』という記録を残しました。中でも『全樂堂日録』には、田原城、清谷橋、加治六田、黒川原、船倉橋、神戸漆田、水川村、谷ノ口、北荒井、蔵王山、衣笠山、滝頭、仁崎の風景が、スケッチあるいはメモとして収録されています。

● 武家屋敷周辺の水仙

崋山はよほど印象に残ったのでしよう。「此地此草多し」と記しています。決して派手ではありませんが、凛として咲く水仙の姿は、当時の庶民から知識人にまで愛されていました。また崋山は、滞在時にこの水仙の絵も描いています。

● 加治の赤土

六田付近を「土色朱の如し(中略)皆火色をなす」と記しました。渥美半島の大部分に、この鉄分を多く含む赤色の土質が見られます。崋山は『参海雑志』の中で、「赤羽

根」の地名の由来となったのは「赤羽丹(埴)」であろうと推測しています。

● 蔵王山、水川村、黒川原の松原

未墾地の雑木は新用に伐採されますが、やせ地である渥美半島では、伐採後に生えてくるのは松です。松は火付け用の葉、薪、建築資材にと利用価値は大きく、人々にとつては貴重な資源でした。松原は、人々の生活に密着していましたが、豊川用水の通水以降、耕地の拡大や生活様式の変化により、人と松とのつながりは希薄になってきました。また最近ではマツクイムシ被害により、日本人の心に深く刻み込まれた松も、その姿を

失いつつあります。

● 田原城から蔵王山

「麦ハ青うしげり 桜ハしろく 椿ハあかく 竹のむらだちたる上 蔵王山秀たるさまよし」

崋山は、田原城から北荒井の間の風景を特に印象深く、このように記しています。今では、ここに出てくるような麦を田原町で見ることが困難ですが、椿、竹、桜は現在でも田原城周辺に見ることができます。中でも、池ノ原公園から椿公園に通じる小道(椿の道)に咲く武家屋敷の椿は見事です。崋山が見たこれらの景観をもう一度見てみたいものです。

▽田原町博物館 22局1720



● 風情ある「椿の道」。春には鮮やかな椿が楽しめます。

今月の表紙 COVER STORY

真夏の太陽。オゾン層破壊の進行で紫外線の害が心配とはいえ、真っ黒に日焼けした子どもたちが外で遊ぶ姿からは、どちらかというと健康的な印象を受けます▼さてイギリスでは。一説によると、彼の地では日焼け信仰があるようです。なんでも季節を問わず日焼けしていることがステイタスとか。なぜかと言うと、年中曇天のイギリスで肌を焼くのは難しく、日焼けは頻繁にバカンスに出かけている証であり、経済的地位の高さを表しているからなのだそうです▼また、小麦色の肌は「セクシー」の象徴として市民権を得ているようで、結婚を控えた女性が肌を焼くことも多いそうです。逆に日本は美白ブーム。お互いに肌の色を変えられることは、変身願望の表れなのかも知れぬれぬ「顔色」をなくしませんように。(写真・白谷海水浴場での一コマ)

【人口と世帯数】

総人口	36,823人		
男性	18,791人		
女性	18,032人		
世帯数	11,507世帯		
出生	29人	死亡	16人
転入	55人	転出	67人
増減	1人		

(平成14年7月1日現在・増減は6月中)

【行政面積】 82.86 km²

(平成11年10月1日現在・国土地理院調べ)